# 曖昧で不確かな関係のふたり

伊吹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
曖昧で不確かな関係のふたり

【Ｎコード】
Ｎ０１４５Ｚ

【作者名】
伊吹

【あらすじ】
ともだち？こいびと？それとも……？そんなふたりの一面を集めた短編集、というか、小話の集まり。時間軸ばらばら、書きたいシーンが浮かべば増えていきます。『シーン』ですので、ヤマなしオチなし、ってことも大いにありうる。◇短編シリーズを連載形式にまとめました。

## そのいち

いつ、どんなときも、どういう状況下でも、整った男だと思う。寝顔でさえも整っているなんて隙がない。

いつだったか、サークルの先輩が学園祭のミスコンにこいつをエントリーさせていた。
結果は、……言いたくもない。
その後しばらくは噂になったもんだ。

――――あの美人は誰だ、と。

正体を告げるつもりなど微塵もないくせに一緒になってその噂を助長させるその言動に幾人もの男子生徒が振り回されたか。
その様子を見て、こいつは腹を抱えて笑っていた。
そのときの顔も、どこから見ても整っていた。きれいだった。

天は二物を与えず、なんてよく言うけどそれは嘘だ。
二物どころか三物四物……それ以上与えられた人間が、ここにいる。
微かに寝息を立てて、他人の家のベッドを占領している。不法侵入だ！　と騒ぎ立てたところで、言いくるめられることは過去の経験上わかっている。
深いため息をついて、油まみれの身体を落とす為にバスルームに篭った。

爪の中にまで入り込んだオイルを丁寧に落とし、上がる頃には１Ｋの部屋においしそうな夕食――パエリヤ――が並べられている。魚介好きのあたしのツボを良く分かってる。

「宿代」
さっきまでベッドを占領していた男は、いつものようにその隙のない笑みを浮かべながら言った。手元はあたしに取り分けてくれる。魚介類を多めにしている。
「どーしたのさ、えっと最近のあの子は……秘書課？　だったけ？」
「いや、あの子じゃない。今日はいつもお昼に行く定食屋の娘さん。なんか家の前に居た」
ストーカーじゃん、それ。
言いたいことを飲み込んで、そう、と一言。こいつの斜め前に座っていただきますと手を合わせて、一口。相も変わらず美味い。
「あんた、最近頓に酷いんじゃない？」
「そうかな、」
「いい加減、女の子に勘違いさせるのやめなよ。大学じゃ上手く立ち回ってたじゃん。どうして会社勤めになってから出来なくなるかな」

この魚介と鶏肉のエキスが染み込んだごはん美味しいし。あたしが作ってもここまでうまくできないと思う。それどころか、何もない平日に手の込んだものを作ろうと思わない。
帰りが遅いあたしは、毎日こまめに料理をしようと思わない。どうしても手抜き料理になってしまう。それこそ時間が掛からないパスタとか。炒飯とか。
こいつが来てくれるとまぁ、助かるっちゃ、助かるけど。
「――――じゃないか」
「なに？　何か言った？」
「いいや、何も。おいしい？」
「かなり。で、いつ帰るの？」
もう、終バス過ぎてると思うけど。そりゃ、タクシーという手もあるけど。今、お金貯めてると言ってたし、無駄遣いはしないはずだ。
「今日は帰りません」

整った顔が、あたしから目を逸らさずに箸を置く。つられるように、あたしも箸を止めて、猫の形をした箸置きに乗せた。

大学時代から住み続けているこのアパートは、少し手狭になってきた。女の子とのトラブルの匂いを敏感に察知するとあたしの家に転がり込む、こいつが次から次へと物を置いていくからだ。

って、そんなことはどうでもよくて。

「なんで？」

「もしかしたら、って思ってたけど。ここまでとは。俺、泣きそう」

項垂れ、拗ねた顔も隙がない。

……なんで、こいつはいつまでもあたしと一緒にいるんだろう。

「なんとなくでもいいんで感じ取ってほしいんですけどー」

「は？」

「もういいや、早く食べて。後片付けもするから」

それだけ言って、やつはもくもくと食べ始めたから、あたしも仕方なく、ご飯を再開した。

夕食の後片付けをしたあとも、昔からこいつが見ている深夜のバラエティ番組を見終わっても、あたしがベッドにもぐりこむ時間になっても、こいつは帰る気配を見せない。

本当に、今日は帰らないつもりなんだろうか。一人暮らしのこの狭い部屋にもう一組布団を収納するスペースも敷くスペースもない。寝るところなんてないというのに、どうするつもりだろうか。

「あたしは寝るけど」

「うん」

「本当に、帰んないの？」

「うん、帰りません」

「……どこで寝んの？」

「そこ」

笑顔で、指差されても。
「あたしがここで寝るんですけど」
「知ってる。俺もそこ」
「いい、けど狭いじゃん」
「えー、突っ込むとこそこ？」
「じゃあ、……あたしは女で、あんたは男だよね？」
「うんうん、そうそう」
や、なんでそんなに嬉しそうなわけ？

やつは勝手にシャワーを浴びて、ウチに置いてあったやつのシャツとジャージに着替えている。ていうか、ウチにそんなものあったっけ？
最近、女の子からのストーカー被害が多く、ウチの潜り込む頻度も高くなってるやつは、あたしの家なのに、物の収納場所もすべて把握している。
あたしが失くした、と思っていた物さえもやつの手に掛かれば、ああそれここにあったよ、と笑顔で言うくらいに。
「そうそうって、……いいの？」
「なぁんか、お前ってポイント外すよな？　狙ってんのそれ？」
「ん？」
「あのなぁ、いいの？　って普通男が訊くもんだろ？　なしてお前が言うの」
深いため息、呆れた表情をして、脱力したやつはもう知らんっ！
とあたしを壁側に追いやってベッドに潜り込んでくる。

「あのね、俺は男女間の友情は信じない主義わけ。だから、お前が俺を仲のいい一番の男友だち～って思っててもんなわけあるか！
と反旗を振りかざします」
「はぁ……」
「あのなぁ、お前のこの機械ばっかり詰まってる脳みそはレンアイ

の入る余裕はないのか、コラ」
「……ない、こともない、と思うけど」
恐る恐る発した言葉にあたしの頭をぐりぐりしていたこいつは、おっ？　とびっくりした目をしてその手を止めた。

だいぶ、近い距離だ。確かにこれは男友だちの距離ではない。
――ということは？
「あれ？　ようやくわかった？」
「……たぶん、」

## そのに

まさにばったりと言うに相応しい再会に対応し切れてない顔を見て、あぁ案外こいつも普通の男なんだなと冷静に思った。
再会って言っても一昨日会ったし、そんなに久し振りってわけでもないけど、場所が場所だけに再会って使ってしまったわけだけど。

「あれ？見たことある顔だけど」
「わざとらしい」
あたしの背中を押してまで、この場に連れてきた友人がわざとらしく首を傾げた。
そこに来て、ようやく我に返ったらしいあいつは、なんで！　と大きな声を上げた。その声に返事をしたのはあたしではなく、今回主催の向こう側の男性だ。
「あれ、お前知り合い？」
「知り合いも何も大学の友人……なんでお前こんなとこ居んの？」
「一人、残業で無理って子が居たから、暇してたこの子連れてきたの。まさかあなたが居るとは思わなかったけど」
またも、あたしに問いかけられたはずの言葉に反応したのはこちら側の幹事、あたしの背中を押してきた大学の友人だ。
それだけ言うと、彼女はさっさと席についてしまったのであたしも、やつと目を一瞬だけ合わせて席に着いた。つられるようにやつも慌てて座る。
急に、友人に誘われて参加したけれど、ちらりと今日のことを聞いた。相手はＩＴ系の将来有望株らしく、イケメン揃いだとか。
一人、見せゴマが居るとは聞いてたけど。確実に、あたしの目の前に座るやつのことに違いない。
めんどくさいことになった……。やつの顔を見てため息をつきたく

なったけど、さすがにこの席でそれはまずいだろうと、無理やり飲み込んだ。
自己紹介が終わっても、まだ微妙に漂うぎこちない雰囲気に、料理もお酒も楽しめない。
別にそういう目的を持ってこの場に来たわけじゃないし、元は取るつもりで食事に徹する予定だった。けれど、これじゃあ折角の料理も美味しくない。
ため息を禁じたわけだし、愛想笑いも疲れた。
正直、帰りたい。
「おい、」
その一言とともに、幹事の男性が目の前のやつを肘で突付いた。そこで、やつは小さくため息をついた。
「今日限りだからな」
その一言で、安心するかのように緊張を解いて、幹事は笑った。

それからはお見事、としか言いようがない。
巧みな話術で、メンバーを惹き付け上手く巻き込んでいく。気まずい雰囲気はいつの間にかどこかへ吹き飛んで、各々が自由に話すことができるくらいにまで打ち解けてる。
一人取り残された感があるけど、もともと目的は元を取ることだし、いい雰囲気でおいしい料理が食べられるなら問題はない。
誰も手をつけようとしなかった、ガーリック風味のピザに手を伸ばす。ちょっと遠くにあるそれは、単に手を伸ばすだけでは届かない。
……だからって諦めるかっ！
腰を浮かして、手を伸ばす。肝心のそれに届く前に、男の大きな手が横から伸びてきて、２切れ持ち上げられる。とろーりとチーズが伸びてて美味しそうだ。
「ホレ。てかお前、何やってんのここで」
その手に見覚えがあったから、何も言わずに腰を下ろしていた。更に取られた２切れのうち、１つをやつが口に運ぶ。

「料理とお酒のみに？」
どうも、と皿を受け取ってまだ熱く、チーズが伸びるように軽く歯を立てて一口。
「お前、いつもこんなのに参加してんのかよ」
「いーや、たまに？　人数合わせで呼ばれるくらい。会費は出さなくていいっていうから、ただ飯？　それでも明日の仕事に支障が出ない範囲で受けてるだけ」
「たまにって、それでも数回は参加してんだろ？　なくなりそうだけど、次はなに飲むか？」
「ソルティードックがいい。数回って言っても2～3回？　ねぇ、この海老とイカのリゾット食べたい」
「お前、誰がこんなに食べんだよ」
確かにメニュー表を見ればイカの姿そのままで、中にリゾットが入ってるらしい。輪切りになってはいるけれど、おしゃべりに夢中な人たちがこれ以上料理を食べるはずもない。
美味しそうだと思ったんだけどな。それに今回はコース料理らしいし、料理の追加は諦めよう。
ギャルソン姿のウエイターにあたしの注文をし終え、メニュー表を置いたところで、聞いてみる。
「そういうあんたは？」
「あ？　俺？」
「なんか慣れてるし」
「あ、気になる？」
「いや、そんなには。べつにどうでもいいし。ね、今度アレとって」
最初に取り分けてから全く手を付けられていないサラダを指差したら、呆れた目をしながらも結局は取ってくれる。
こういうとき、腕が長いといいよね。
「俺は、ただの場の和ませ役」
「ん？」
「さっきの答え……ったく、ちっとは興味持てっての」

「まぁ、あんたを嫌う人間はそうそういないだろうし。なにより、あんた目当てで女の子が集まりそう」
「そんなこともない、……とは言い切れねぇけど」
どこか歯切れの悪い言い方に、あたしはピンと来た。
たぶん、こういう飲み会で失敗したんだ。こいつにその気はないけど、女の子がその気になっちゃったわけだ。
ホント、昔に比べると要領悪くなったよね。大学時代しか知らないけど、上手い具合に立ち回ってたのに。なんでこうも不器用になっちゃうかな。
会社って、生まれ持った才能だけじゃやっていけないってことかな？
てか、こいつ目当てで飲み会に参加するなら、そういう意志を持った男性陣は女の子全部持ってかれちゃうって心配しないのかな。
「お前、今なに考えてる？」
「や、あんた居たら、彼女作れなさそうだなーって」
そのまま、会話を楽しんでいる男性陣に目を移して、戻ってくると納得したように頷いている。
「別に、そういう目的じゃねぇし」
「そういうもん？　手っ取り早く彼氏彼女つくろーって飲み会じゃないの？　これって」
「んな単純なもんじゃねぇって。そりゃ、そういうやつも中にはいるけど、こいつらはただ女の子と飲みたいだけ。お知り合いになりたいの」
で、どうせ飲むなら可愛い子がいいだろ？　だから、俺を餌にするわけ。でもときどきマジなやつがいつからヤなんだよ。
ぬるくなって、泡も消えてしまったビールを流し込む。
「んじゃ、一昨日も？」
あたしのその言葉に苦い顔を浮かべる。一昨日も、相変わらず人のベッドを占領していたのだ。
「ちょっと、な」
「珍しい」

「……分かってんのか？」
「女の子といざこざがあったんじゃないの？　例の如く」
「ちょっとは気にしろよ」
「なにか言った？」
「なんにも。お開き？」
聞き返したのに、はぐらかされる。
バカにされた気分で、問い詰めようとしたのに、いつの間にか帰り支度を始めたのを見て、慌てて時計を見る。2時間は経っている。
今日も愛想笑いをしながら、少しセーブして食べなきゃだろうなぁ、とか思ってたのに、やつがいたから満足に食べれたし。
今日の元はとった。
あたしは、何も出さないけど。

今日は金曜日。明日は珍しく休みだ。
そのまま、2次会へとなだれ込む人たちとは別れて、自宅への道を辿る。後ろにおまけがいるけど。
アパートの前まで来て、後ろを振り返る。2～3歩離れた位置で、付いて来ていたやつはあたしの視線を受けて、目で問い返す。
「上がってく？　お茶くらいならあるよ？」
話したいこともあったし。心の中で付け加える。やつはあたしの言葉に目を瞠ってから、深い深いため息をついた。そして、恨みがましくあたしを睨んでくる。一体、なに！
「お前、なにもわかってないのな？　俺、かなしい」
「はぁ？　わけわかんないって」
「いいですいいです。さっさと風呂入って寝ろ」
投げやりな台詞と振り返った背中に怒りがじわじわとくる。馬鹿にして。
「もう、いい！　言っとくけど、あたし転属になりそうだから！　じゃね！」
エントランスに入って、十分、間をおいてからやつの信じられない、

というような声が届いた。

## そのさん

キーケースを取り出して鍵穴に差し込むときが、一番好きだったする。

「あーあー、また片付けもせずに出て行って」

俺がいつ来るかわからないというのに、部屋着やらなんやらを脱ぎっぱなしにして仕事に出かける。玄関を開けて、奥の部屋に脱ぎ捨てられたそれらを見てため息をついた。

買ってきたばかりのスーパーの袋をキッチンに置いて、上着とネクタイをするりと外して、俺が持ち込んだハンガーに掛けて、まずは部屋の片づけから始める。部屋着を集めて洗濯籠に突っ込む。

……あいついつから洗濯してないんだ？

溢れんばかりの籠の中身に、ガサツなあいつの性格がモロ出ていて苦笑した。

洗濯機を回して、ようやく夕飯の準備に取り掛かった俺。ホント、主夫してんよなぁ、って。

こんなに尽してんのに、どうしてあいつはこうも変わんねぇの。機械しか詰まってねぇ脳みそにどうにかこうにか隙間を作ってるつもりなんですけどー。

俺って健気だよなぁ、と一人自分を慰めて、これも惚れた弱みっつーんだろうよ。といつもの考えに落ち着く。

とりあえずは、あいつを餌付けして離れらんないようにするのが先決。

あいつの好きな魚介類をふんだんに使ったレシピばっかりが頭の中に詰まってる俺も、俺だけど。

全ての支度を終えて、時計を見てもまだきっと帰ってこない。

一人で食べるつもりは毛頭ない。帰ってくるまで待つつもりで、いつものごとくベッドに横になる。

――男が自分のベッドに寝てても、興味なしだもんなぁ。あいつ。
ベッドの匂いって、あいつの匂い。思考が全てそっちに引きづられる。男ってつくづくバカな生き物だよな、と実感する。
あー、寝たいのに眠れない。
何度も寝返りを打って、打つたびに舞い上がるあいつの香りに、悶えて悶えて。
結局、玄関のキーが回される音がするまで、眠れなかった。
「また来てるし」
玄関から、声が聞こえる。その声に反応しちゃう正直な俺に、へこみながら目を閉じて寝たふりを続行する。
そのうち、鼓膜を震わすのはシャワーの音。
ぎゃー！　考えるな考えるなっ！
耳を塞いで、身体を丸め、外界の情報を一切遮断したかったのに、またも香しい俺を惑わすいい匂いで、ベッドから飛び起きた。
……メシの準備しよ。
意図的に、シャワーの音を聞かないように聞かないように、と温め直して、テーブルに並べた。

「今日は帰りません」
帰るかど阿呆。
だいたい、俺が女の子にストーカーされるほど間抜けなことするかっ！　ちっとは察知しろっ！
確か、こないだ置いてったままの俺の服があるし、準備万端なんだよ、こっちは。
そこまで思って、冷静になると泣きそうになる。……俺って、彼氏の家に泊まりに来る女の子みたいじゃね？

「あたしは寝るけど」
そりゃ、ベッドに横になって、布団も半分掛けてりゃ、言われずとも見ればわかる。

シャワー浴びたし、俺も寝るだけ。もちろんそこしかねぇだろ。指差してにっこりと笑う。
そーいや、昔からこの顔に釣られんよな。こいつ。
「あたしがここで寝るんですけど」
困ったように、眉を下げて。俺の言葉に、今度は首を傾げた。こらこら、そんな隙ばっかじゃ喰われるぞコラ。
「いい、けど狭いじゃん」
お前なんか、すぐに喰われていいように扱われんのがオチだって。ここまで、どうやってのうのうを生きて……、俺のおかげ。俺が頑張ってたんだって。狼の群れに放り込まれた迷える子羊ちゃんを身体張って守ってますって。
男と女、ってホントわかってんのかこいつ。今日は帰らん、と俺が言った時点で感づいてもいいんじゃね？　もうちょっとアンテナ張ってろよ、頼むから。
この機械オタクにレンアイの二文字を刷り込むのは手間がかかるだろうなぁ、とわかっちゃいるけどね。ちょっとやそっとじゃ理解しないあんぽんたんにはストレートに言うのが一番、ってわかってるんです。わかってるんですって！
ここまで付き合いが長いと逆に言えないんだって。
男友だちとしか思ってないこの魔性の女めっ！　いいの？　って立場が完全に逆転してんの気付いてるのか？　もしかして、俺はいいようにこいつに扱われてんのか？
「狙ってんのそれ？」
そうだったら、お前最悪の女だな。それに従う俺は、……本当に、健気だよな。
「あのなぁ、いいの？　って普通男が訊くもんだろ？　なしてお前が言うの」
俺が、言ってみたい。お前に、いいのか？　って。――――――無理か。無理だろ。無理だよなぁ。
「……はい、寄って寄って。俺も寝るから」

部屋の電気を真っ暗にして、ベッドが狭いことをいいことに、隙間を埋める。
「あのね、俺は男女間の友情は信じない主義なわけ。だから、お前が俺を仲のいい一番の男友だち～って思ってても、んなわけあるか！　と反旗を振りかざします」
頼りに出来るのは、声と身体で触れる反応のみ。気配から、戸惑いしか読み取れない。……こいつは、俺を何だと思ってるんだ。イイヒトで終わらせてんじゃねぇぞ。
「あのなぁ……お前のこの機械ばっかり詰まってる脳みそはレンアイの入る余裕はないのかっ！　コラッ！」
分かってるけどね。悲しくなるんです。こんなにちっこい頭の中は機械のことしか入ってねぇんだよな。俺のこと入ってんのか？
「……ない、こともない、と思うけど」
あれ？
意外な反応にようやく闇に慣れてきた目が、首をねじってじっと俺を見ている目を捉えた。
「あれ？　ようやくわかった？」
「……たぶん、」
いじらしいじゃねぇかよ、このやろう。
これ以上ないくらいに隙間をなくすためにぎゅーっと抱きしめる。
あー、さっきまでの思考に囚われる。このまま落ちてしまえばいいのに。
鼻をくすぐる生の匂いと、どこを触っても柔らかい。――――じゃなくてっ！
「今日はお前をこってり絞ってやるって決めてたんだ」
「え？」
「とぼけんなよ、転属ってなんだ？　この、言い逃げしやがって」
突き放して、睨みつける。こいつも俺の目が見えてるんだろう、怯んだ。
「十分に説明するまで、寝かせん。吐けっ！　転属ってなんのこと

だ？　あっ？」
「ガ、ガラ悪くない？」
「うるさい、なしてこのタイミングで転属？　お前、希望出してたわけ？」
「あはは、……ここ2、3年出してた」
「どこ」
愛想笑いで答えを避けようとするようすに、苛立って右手で両頬をつかむ。ぎゅっと力を入れて答えろ、と。
ゆがんだ口元からこぼれた地名に思わず動揺してしまう。いやいや、確実そのままサヨナラコースでしょ、これは。
「なして。……そうだよな、そうだよ。お前はそういうやつだよ。レンアイよりもオイル塗れに生きがいを感じる女だよ」
ここまで尽しても、俺って報われねぇよ。
2人で横になったベッドは狭くて、身動きすると簡単に落ちてしまいそうになる。背中側が心許ないのは重々承知しているけれど。
もぞもぞと、寝返りを打ってこいつに背を向ける。寝ろ、と伝えて自分の片腕を畳んで枕に見立てて目を閉じる。
「ねぇ、……もう寝たの？」
同じように、寝返りを打ったらしい。布団がどんどんあいつのほうに持っていかれる。腹の前で組んでいた腕に、細い指先がつつーっと辿る。その仕草は背筋をゾクゾクさせるほど、俺の意志を惑わすってことわかって、……るわけねぇよな。
手の甲に重なった、華奢な手をぱちりと叩く。
「寝なさい、」
「このど阿呆！」
乱暴に寝返り打って、壁を向いたあいつがぎゅっと身体を丸めて、その反動で突き出たお尻に、俺はベッドから転がり落ちるしかなかった。
「あんたは、床で十分！　おやすみっ！」
いやいや、泣きたいのはこっちなんですけど。

もうちょっと、早めに行動をすればよかったと後悔だけは、絶対にしたくなかった。

## そのよん

目を閉じて、真っ暗闇の中で聴覚が鋭敏になっていると、声までも完璧だ、と知った。どういう声、とは言いづらいものの、それがオンナゴコロを絡め取ってしまうのだろう。
細かに鼓膜を震わすその低音は一旦、電気信号に変えられているとはにわかに信じがたい。
本当にこんな声だっただろうか。こうも、あたしを絡め取るとは。
直接聞く声よりも、痺れる。この普通でない状況がそれを促進させているのかどうかは知らないけれど。

今。あたしの世界には、やつの声しかなかった。電気信号に変えられた、凶器とも言える、低音ヴォイス。
よくよく考えてみれば、今までこいつと電話越しに話したことなど数えるほどしかなかった気がする。それほど、同じ時間を同じ場所で過ごしてきたし、お互いの予定を支障が出ない範囲で把握していた。
だからこそ、電話での声はあたしにあれやこれやと考えさせるのかもしれない。……けれど、これを迷惑だと思うくらいには、あたしはそれ以上に囚われる思考がある。
『聞いてんの？』
調子よく話していたはずの声が、急にトーンを変えて不機嫌さを前面に押し出してきた。それさえも、震わす。……何を、とはあえて言わない。言いたくない。
あたしの思考の一部だとしても、徐々に侵食していく。あたしにとって一番、とも言える考えがじわじわと押されていく。
「聞いてる」
『……さっきから俺ばっかしゃべってんじゃん』
「そうだっけ？」

あんたのこと考えてるから、なんて言ったらやつはどんな反応するかわかってるから、あえて言わない。あいつの言うとおりあたしはレンアイ体質じゃないんだろうな、きっと。
『そうだよ。お前、一言ずつしかしゃべってねぇじゃん。うん、違う、そう、そう、ふーん、聞いてる、ってさ』
「そうだったっけ？」
返事したこと、覚えてないんだけど。無意識って怖い。
『そうだよっ！　お前、今何してんだよ』
不機嫌さを隠そうともしないやつの声は次第にその完璧さを欠いていく。聞くに堪えない、とまでは言ってはかわいそうだけれど、発する本人をよく知っているからこそ、その怒りに満ちた声は似合わない。
これ以上、あたしの一番を侵されたくない。いままでのあたしのまま居たい。
今まで恋して浮かれる友人らを見て、ああはなりたくないな、と思っていた。レンアイであたふたするあたしを、一番見たくないのは、他でもないあたしだ。
だから、答えた。速度を上げて侵食し始めた思考を無理やり押し込めるために感情を込めずに。
「何って、ベッドで寝てる」
付け加えて言うなら、真っ暗闇の中で、ベッドの横になっている。
さらに詳しく言うなら、電気を消したのは1時間ほど前だ。さらにさらに細かく言うと、電話が掛かってきたときにはすでに浅く眠りについていた。
『……もしかして、お前寝てた？』
「もしかしなくても寝てた」
『ごめん。……でも早くね？』
「今日は疲れたの。明日も早いし。……もういい？」
音以外伝わるはずのない携帯電話から、やつが口を閉ざし困ったように眉を寄せた様子が伝わった、気がする。もしかしたら、泣きそ

う、だったかもしれない。
言い方間違ったかな、と思い至ってどうフォローしようかと考え、ようやく口を開こうとしたとき、電気信号に変えられた声が耳に届く。
『おやすみ』
予定していた言葉を継げず、その言葉の返事さえもさせてもらえず。ツーツーと無機質な機械音が鳴る。
失敗したかな？　頭の片隅に掠った思考も無理やり押さえ込んだ甲斐があってか、すぐに睡眠欲に負けて掻き消され、そのまますーっと眠りに付いた。

## そのよん（後書き）

少し先の未来

## そのご

広い空間に集まった人たちは声を出すこともなく、静まり返っている。これだけの人数が集まっていながら固唾を呑んで見守っているというのもおかしな光景だった。
最後のパーツをはめ込んで、食堂の白い長テーブルに立てると、一斉に拍手が沸き起こった。
実際は、静まり返っているのはあたしの周りだけで、あとはいつものようにざわついていたんだけど。
あたしを取り囲むようにできた輪が突然拍手喝采になったら、やはり人の注意を引くだろう。ただ、人が集まって静かにしているというだけで異様な雰囲気なんだし。
椅子に座っているあたしにとっては、周りに直立した暑苦しい男ばかりしか見えないけれど、それでも肌は人の視線と囁き声を感じている。……あたしの自意識過剰な部分もあると思うけれど。

ちょっと、通して。はいはい、ごめんねー。
明らかに周りに居る男と人種の違う声が耳に割って入ってくる。
「なになに、なにやってんのこれ。……って女？」
ちょうど、あたしの真後ろから聞こえた声が、人を割って現れるのと同時にあたしは振り返った。
男たちは、その自分とは対極に居るであろう男に近付くと火傷するとでもいうように、じりじりと距離をとった。まるでどっかのお偉いさんがが海を割ったというあれみたいだ。
腰を捻り、後ろを振り返った状態で、現れた場違いな男を数秒見つめたあと、くるりと向き直って、テーブルの上に散らばったプラスチックのゴミを集めて、片づけをする。
「今日は店じまいってことで。残りは明日渡す」
えぇ！　でもここで作ってくれるって。

予想しない闖入者に怯んだギャラリーも、あたしの一言で我に帰って不服を唱える。ブーイングの嵐のなかテキパキとゴミを袋のなかに収めるとあたしは席を立った。
これ以上文句を言ってもあたしに届かないと感じたのか、ゆっくりと人が捌けていく。そのなかで、あたしは一番に輪の中から抜け出した。

ボディバッグを背負い直して、食堂を出て、家に帰ろうと構内を横切るために、中庭に差し掛かったとき、左肩を掴まれた。
ねぇ、と強引に振り向かされたら、そこにはさっきの闖入者。何事か、と不機嫌さをあらわにして眉をしかめた。
「そんな顔すんなよ。なにやってんの」
馴れ馴れしい。
あたしの肩を掴んでいる男の手を右手で乱暴に振り払うと、また家へと歩き出す。
同時に半歩後ろを付いてきた男に気付きながらも、無視。
さっきの食堂よりも視線を感じるのは間違いないと頭の片隅に浮かぶ。……一体、なんなの。
「あんたが噂の？」
どんな噂か知らないけれど。言いたいことを飲み込んで、ひたすら足を進める。どうにか撒きたいけれど、そこはリーチの差があってどうにもならない。
「あれってさ、本当に」
あまりにもしつこい。門をくぐるまで付いてきたから思わず立ち止まる。
「本当。あれは小金稼ぎ。プラモデルとか細かいの作るの好きだけど、プラモデルはほしいと思わないから小金稼ぎしてるだけ」
言い切ったもんだから、男も怯んだのかもしれない。ぐっ、と口を閉ざしてあたしを見てる。あたしは目だけで問う。他に訊きたいことはないのかって。

「ないなら、あたしは帰るけど。どこまでついてくるつもり？」
数秒だけ、待つ。
今の間も、じろじろと不躾に寄せる視線がある。……その原因は目の前の男にあることをあたしは知ってる。
この男が、あたしを噂で知ってるように、あたしも、この男を噂で知ってる。
何かを考え、まとまったのか、口を開こうとしたときクラクションが鳴った。立ち止まっていたあたしたち、――実際に通行の邪魔になっていたのはこの男だけだけど、に鳴らした。
出鼻を挫かれた形になって車道の脇に避ける男をよそにあたしは、もう一度歩き出す。
あっ、と中途半端に引き止めるような声が聞かれたけれど、それ以上付いてくることはなかった。

一体、なんだったんだ。
入学して1か月しか経っていないというのに、騒がれている男があたしに一体何の用なんだと首を傾げるしかなかった。
家に持ち帰ることになったプラモデルの箱を空け、組み立てながら思い出す。
一度、つくり始めたら全てを忘れてしまっていたけれど。それを後悔するとはそのときまでは一切思わなかった。

# そのご（後書き）

出会い編

## そのろく

筋肉と筋が浮き出るその腕を視界に入れて、あたしとは違うと思うのももう何回目だろう。
段ボールの数が着実に増えつつある。引越しまであと1週間もない。あまり必要のないと思われる日用品から段ボールに詰めていき、ときおり仕舞ったものが必要になったりして、再び開けるという結構面倒なことをしている。あまりにも面倒だから、引越し前日に全て詰め込もうかとさえ思う。
手伝う、と無理やり上がりこんできたやつの働く後姿を手を止めて見ながら、ため息を一つ零す。
わけがわからない。どうして、こうなったのか。
勝手に転属希望だしやがって、と問い詰められたかと思えば。今日はにこにこ顔で機嫌が良さそうだったし。
何かあったに違いない、と思うけれど。あたしに思うところはなくて、その機嫌のよさがちょっと怖かったりする。
趣味で集めた、設計画集をすべて段ボールに詰め込んで、端に寄せようか、と手に掛けた。
「って、持ち上がらん」
中腰になって、上に抱え上げようとしたのに重たくてビクともしない。
無理に持ち上げても、よろめいて落とすのがオチだろうな、と立ち上がって、床に置いたままの段ボールを見下ろした。
「何やってんの、段ボール睨みつけて」
「睨みつけてた？」
「そりゃ、もう。怖い怖い」
おふざけで、軽い調子で笑った。
「持ち上がんなくて。どうしようかな、って考えてただけ」
「なら呼べよ、運んでやるから」

そう簡単に言って、よっと、と掛け声とともに、簡単に持ち上げた。
――――男と女の差ってこういうところで現れるわけだ、と妙に感心してしまったけれど。
一瞬だけ。本当に一瞬だけ、その仕草に動揺させられた。そんなに気にもしていなかったオトコとオンナというものに最近、気になりだしてしまった。
「おまっ、重いよ。ちゃんと考えて入れろよ」
「そう言いながら、らくらく運んでんじゃん」
「そりゃ、お前と俺とじゃ力がちげぇから」
確かに、オトコとオンナじゃ筋力も違うだろうけど。そう言葉で一々言われなくても痛感してしまう。
持ち上げたときに出来る腕の筋肉の隆起とか、あたしには絶対ないものだし。だから、見惚れてしまったと思いたくないのに、またその腕に意識を奪われる。
どこに置く？　端っこ置いとくぞ。そいや引越し日曜だったよな？
　手伝ってやるよ。月曜も休もらったし。
「はい？」
独り言かと思って、軽く聞き流していたら聞き捨てならない言葉に耳を疑う。思わず、反射的に聞き返してしまった。
「だから、手伝うって」
「手伝うって、飛行機だよ？」
「車で行こーぜ」
「はぁ？　きついよ」
「ドライブドライブ」
「ドライブの域を十分超えてるから。なに考えてるの」
車の中でじっとしたまま何時間も、無理。飛行機で行けばたった数時間で着くものをわざわざ狭苦しい車内でその何倍もの時間をかけていくというのか。
もう決めた、と聞き耳持たないやつの背中にそこに落ちてたガムテープを投げつけた。

「痛ぇよ、手癖わりぃって」

「あんたが車持ってるって初めて知ったんだけど」
レンタカーにでもするのかと思えば。マイカーだという。
独りもんがファミリー向けの車を持ってる意味がわからない。荷物もいっぱい入るぞ、と気付けば後部座席は段ボールやらなんやらで埋まっている。
「俺もいろいろと考えてたわけよ。ま、そのどれもが未だに考えのままってのが悲しいところだけど」
意味深な言葉を発し、慣れた手つきで車を発進させ、いつの間にか単調な景色がものすごい速さで流れている。
「な、サンドイッチ食いたい」
前を向いたまま左手をあたしに差し出してくる。出発してすぐに立ち寄ったコンビニ。朝早くに出発したから店も開いていないだろうというやつの考えらしい。
言われるがままに、包みを開けて左手に乗せる。
「いいなぁ、こういうの」
「はい？」
「気にすんな。トイレ行きたくなったら早めに言えよー」
バカにすんな、とやつを見ずに腕を伸ばして、頬に拳を喰らわしてやった。ぐえっ、なんてわざとらしい言葉を吐いてくれたんで、今度は本気で頭を叩いたんだけど。
振り落とした手首を簡単につかまれて、その頭に、髪にさえ触れることが出来なかった。
高速で運転しながら、その所業。敵わないと思いたくないのに、まざまざと思い知る。
ムッとなって、やつの手を乱暴に振り払ってあたしは、窓の外を眺めた。
「なに怒ってんの？　拗ねんなよ」
運転席から投げかけられる声を無視し続けていくと、徐々にスピー

ドが緩み流れる景色が鮮明になってくる。完全に車が止まったとき、サービスエリアの端っこ、周りに車が数台しか止まっていない、店からもお手洗いからも離れた場所に停車していた。
「無視されんの、すげぇつらいんですけど。なぁ、聞いてる？　こっち向けって」
本当は、外に出ようと思った。それを見越してか、運転席からロックされた。だから、ムキになって意地でも振り向いてやるもんかって思った。

――――最近のあたしはどうかしている。
ちょっとした、やつの言動でイライラしたり、こうやってムキになったりして。そして、その全てに、あたしとの違いを思い知る。
「なぁ、ホント。どしたの？　何に拗ねてんの？」
あー、もう言っちゃうけど。俺、お前に無視されんのが一番堪えんの。分かってる？　本気でへこんで、本気で沈むの。あと数える程度しか一緒にいる時間ないって気付いてる？　明日、俺戻るの。そしたら遠恋になんの。
「わかってる？　ドゥーユーアンダースタン？」
「バカにしてるでしょ、あんた」
「あのね、これでも俺、結構我慢してるの。飛行機乗って、ハイお別れ～って寂しいと思ったから、こうやって一緒に居る時間をひねり出してるの。あぁ、もう、もっとオトコゴコロをわかりなさい。というか俺の気持ちを知れや」
長い言葉をつらつら連ねて、気付くと、あたしは振り返ってやつの顔をまじまじと見ていた。
「ドライブしたかったからじゃないの？」
本気で思っていた。
呆気に取られたやつの顔は見ものだった。あぁ、忘れることなんてできないくらい、間抜けだった。
「～～～～～もう、知らん。勝手にせいっ」

理由はわからないけれど、怒らせてしまったことは分かった。乱暴にアクセルを踏んで、発進した車がそれを物語っている。
引越し先に着くまで、やつは一人機嫌を悪くしていた。そして、次に発言したのもやつだ。間抜けにも「どこにいけばいいのか」なんて眉尻を下げて聞いてくるもんだから、ついつい笑ってしまって、また不機嫌になってしまったのだけれど。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0145z/

---

曖昧で不確かな関係のふたり

2011年11月30日21時52分発行